

マルパ2021年度～2024年度研修会及びワークショップ報告

2021年度

マルパ第1回研修会「定住外国人のこども・若者たちの現状と課題とは？」
（2021年11月14日） 2

マルパ第2回研修会「難民というアイデンティティを固定化しないために」
（2022年1月9日） 4

2022年度

マルパ第1回研修会「DEAIの概念からインクルーシブなミュージアムを考える」
（2023年2月18日） 7

マルパ第2回研修会「演劇を用いた多文化共生の試み」（2023年3月18日） 8

2023年度

マルパワークショップ「みんなのもので 誰のものでもない 絵を描こう」
（2023年9月2日、3日） 10

マルパ研修会「多文化共生と演劇～その繋がりの可能性について～」
（2024年2月18日） 11

2024年度

マルパ第1回研修会「日本に住んでる世界の人との出会い
～難民・移民フェスで進む理解と共生～」（2024年11月4日） 12

マルパ第2回研修会「あなたも私もしている！？無意識の差別を超えて
～マイクロアグレッションの視点から～」（2024年11月23日） 12

マルパ2021年度～2024年度
研修会及びワークショップ報告

（公財）かながわ国際交流財団

2021年度

2021年度からマルパプロジェクトはメンバー各館のより自立的運営を目指しながら、研修会については財政支援を行いつつ事務局機能を担ってきた（公財）かながわ国際交流財団の事業計画変更に伴い、美術館における多文化対応力向上を主なテーマとする方向性に舵を切った。マルパ以外の学芸員等向けの講演会ともなった本年度の2回の研修会について、その内容をお伝えすることとしたい。

マルパ第1回研修会
「定住外国人のこども・若者たちの現状と課題とは？」
（2021年11月14日）

第1回では美術館学芸員の多文化状況に関する基礎知識の再確認の目的から、2つの講演を開催した。

①講演会「日本で育つ外国ルーツの子ども・若者たち」
初めに日本国内全体の多文化な状況について把握するため「日本で育つ外国ルーツの子ども・若者たち」と題して、マルパ実行委員の海老原周子さん（一般社団法人kuriya代表理事、文部科学省外国人児童生徒教育アドバイザー）に講演していただいた。

我々が時々耳にする「外国ルーツ（外国につながる）」ということばは、両親とも外国籍で自分も外国籍の子どもだけでなく、両親のどちらかが外国籍で自分は日本国籍の子どもも入るという。こうした外国ルーツの子どもたちの中には日本語指導が必要な児童・生徒

たちがいる。そして、その数は公立学校全体（小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・義務教育学校・特別支援学校）では10年間で約1.5倍（2008年：33,470人→2018年：50,759人）、公立高等学校だけでみると約2.7倍（2008年：1,562人→2018年：4,172人）に増加している。全国的には外国人集住地区（浜松市・神奈川県など）では外国ルーツの児童・生徒たちの母語として、フィリピン語、ベトナム語、ウルドゥー語などの少数言語が増加し多様化が進展する傾向にあること、また、集住地区ではない地域に立地する小さい工場で働く外国籍の人たちの子どもたちも少ないながらも学校で増え散在化の傾向があることが文部科学省等の統計等から紹介された。

海老原さんはこれまで300人以上の外国につながる子ども・若者たちを支援してきた経験から、日本語力の不足や将来展望が描けないという課題の背景として、それぞれの家庭において「経済力の低さ」、「ネグレクト」、自身がヤングケアラーにならざるを得ないなど複合的な課題を抱えていることがあるという。そうした複雑さを子ども・若者たちが言語化することは困難である。海老原さんは美術館学芸員には、こうした子ども・若者たちを対象とする教育普及活動（ワークショップ等）では、家庭内で複合的な課題にさらされている子どもたちもいるということに思いを馳せてほしいと語った。

②講演会「外国人教育相談窓口から見える神奈川県の多文化な状況」

続いてマルパプロジェクトの美術館が立地する神奈

川県内の多文化状況を把握するため、マルパイイベントにボランティアとして関わった経験もある加藤佳代さん（神奈川県立地球市民かながわぶらざ・外国人教育相談コーディネーター）に3つのテーマ（1外国につながるを持つ子どもの状況、2外国人教育相談の事例、3意識してほしいこと～考えるためのヒント）で講演していただいた。

神奈川県内では公立の小・中学校に通う児童生徒総数は近年減少している（2016→2020年：657,854人→641,964人）一方で、外国人児童・生徒数及び日本語指導が必要な外国籍・日本国籍の子どもたちが増加している。その母語も中国語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語、ポルトガル語、英語の順に多く、英語以外を母語とする子どもたちが圧倒的に多い、また、神奈川県教育委員会が「公立高校入学のためのガイドブック」を10言語で作成しており、母語での高校進学についての説明が必要な生徒や保護者も多いとのことだった。

外国人相談事例を多数紹介する中で、全体の約3割を占める保護者からのものとして、「中学校の先生に『ここなら入れる』と言われ、入学させた高校が通信制高校だった。通信制とは何?」「日本人の親達とうまく交流できない。本当は関わりたいが、日本語がうまくできないので控えている」「子どもが口を利いてくれない。『話してもどうせわからない』と言う」など不確かな伝聞や推測による事実誤認、コミュニティの中で味わう疎外感、共通の言語を持たない親子間のコミュニケーション不足から生じる気持ちのずれ等があるという。それらの解消のためにはストレスを発散して安心

して充電できるサードプレイスの必要性、地域の図書館がそのサードプレイスになりうる可能性を加藤さんは感じているとのことだった。加藤さんらが横浜市中心図書館等で開催した外国人学校の絵画展のワークショップ「絵とおはなししよう!」では、来場者はそれらの絵画にインスピレーションを得て、何かを創り出したり、自分を語り出すことを実見して、「アート」が持つ可能性も実感したとのことであった。最後に、まとめとして「当事者の声をきく」「実情を知る」「行動の奥にある、違う文化を理解する」の3点を視聴者に意識してほしいとした。



神奈川県の多文化な状況－南米食材店
サボールラティーノ（左）加藤佳代さん（右）



神奈川県の多文化な状況－東京横浜地球プラザ

マルパ第2回研修会

「難民というアイデンティティを固定化しないために」 （2022年1月9日）

第2回の研修会では美術館教育普及事業において、移民・難民といった社会課題を意識しテーマとして取り入れることで、学芸員や美術館職員がさまざまな異文化を持った人々に対してフレンドリーなやさしい美術館のありようを模索できるのではないかという観点から、劇団ポルト・ビーを主宰する演出家・高山明さん（東京藝術大学大学院映像研究科教授）に講演をお願いした。高山さんはこれまで実に数多くの演出を手掛けてきたが、今回の講演会ではホスト社会側の難民に対する意識がテーマとなり、「難民というアイデンティティを固定化しないために」というタイトルとなった。高山さんの移民・難民に関するアートプロジェクトには自身が2か月ほどある事情で家に帰ることができず、池袋のネットカフェでの寝起きやマクドナルドを点々とした経験がベースにあるという。そこで実際に暮らしている人たち（ネットカフェ難民やマクドナルド難民）の存在を実感し、それ以降、それを自分の表現の中で考えていきたいと思ったという。

■個室都市・東京

「個室都市・東京」は高山さんが最初に難民を扱ったもので2009年開催の演劇祭「フェスティバル/トーキョー」でのプロジェクトである。毎日いろいろな人がたむろする池袋西口公園前に建てた、窓がないネットカフェを模したプレハブで、公園でのインタビュー320人分をコンテンツとする320個のDVDの中から、参加者は5枚を選択し

て個室に入り見ていく。DVD5枚を借りて個室で見て終わる人もいれば、新しい5枚を借りて見ることを延々に繰り返す人もいたという。このインタビューは1960年代に劇作家・寺山修司が参加したTBSのドキュメンタリー「あなたは…」に想を得ており、「あなたは一体誰ですか?」を最後の質問とする点で「あなたは…」と同じである。このインタビューでは公園にいる人々向けに「今、一番ほしいものは何ですか?」「朝食は何を食べましたか?」「マクドナルドにはよく行きますか?」などの新たな質問を作った。高山さんによれば、難民の苦難を舞台上で語ってもらうことは、その人が難民であるという事実をひょっとすると次の日、あるいは1年後に変わるかもしれないアイデンティティを固定化して見世物にする。それはできないと思え出したのがこの方法だったという。



神奈川県の多文化な状況－カンボジア憩いの館（寺院）



あーすプラザ外国人教育相談

■マクドナルドラジオ大学

高山さんが2014年からドイツ・フランクフルトのムゾンテウム劇場のアソシエイト・アーティストとなり、新劇場長就任のこけらおとしとなったプロジェクト「完全避難マニュアル・フランクフルト版」が終わった頃から、シリア・アフガニスタン・アフリカからの移民が街中で多くみられるようになった。当時、難民を扱った舞台や美術作品があらゆるところで爆発的に増えた。舞台上に難民の人を上げて彼らが辿ってきた道のり、母国の政治状況などを訴える演劇、難民の人をテーマにした映像作品・インスタレーションである。高山さん自身はあまりにも難民のアイデンティティを固定化して展示するような作品ばかりが増え、それらが消費されるだけでは、何も社会は変わらず、逆に難民のアイデンティティが「難民」という一つの立場だけに固定化されていく危機感を同時に持ったという。

高山さんによればフランクフルトにやってきた難民の人たちにインタビューをすると、アテネ（ギリシャ）からオーストリアのウィーンまで徒歩で来てそこからだいたい電車で来て、フランクフルトで止まってしまう人が多いという。この長いバルカンルート（アテネ、マケドニア、コソボ、セルビア、ハンガリー、オーストリア、ドイツ）を歩く途中で暴行や収容を受けることもあり、セーフティネットとなっているのがバルカンルート沿いに点々としているマクドナルドであった。彼らの生命線はスマホである。スマホで連絡をとる、道を調べる、家族との情報交換をする。マクドナルドでは電源使用やWi-Fi使用がOKであり、場合によってはご飯を食べる、寝ることもできる。しかしながら、難民にとっては

マクドナルドが生命線なのに、難民問題を受け入れ、難民を助きたい良識派はマクドナルドを「資本主義の象徴」、「グローバリズムの先端企業」として嫌う。その溝に何かさしはさめるものがあるのではないかと高山さんは考えた。

2017年2月から3月にかけて、ムゾンテウム劇場の地下にある喫茶店をマクドナルド仕様に改装し「マクドナルドラジオ大学」が作られた。店舗内ではフードやドリンクの他、「レクチャー」が購入できる。レクチャーはそれぞれ1ユーロで購入できる、難民の人たちによる15の授業（文学/哲学/生物学/会計学/ジャーナリズムなど）である。この「教授」たちのほとんどは本当の学者ではなく、彼らの人生経験や蓄積を「授業」とするのは半年間かかったという。ドイツの難民政策では宿が提供され、月200ユーロまで稼ぐことができるが、それ以外の時間はドイツ語などの学習に充てなくてはならず、「難民」でいないとこうした支援を受け続けることができない。一人一人は難民以外の面も持っているのにそれらを表現する場がなく、非常に苦しいと聞いた高山さんが、ドイツ語を学ばなくてはいけない立場の「難民」という人たちが、実は全く違う側面を持っていて、彼らが持っているものをドイツ人に教える機会としたのが、マクドナルドラジオ大学であったという。高山さんがマクドナルド側とさまざまな交渉をして、店舗内で授業を開催してもよいが、一人の教授が講義し生徒がその周りに集まるといった形式は取らないという合意に至った。そこで、マクドナルドラジオ大学では、「教授」が店舗内のテーブルの一つに座りマイクに向かって授業をする、FMトランスミッターを介して、同じ

店舗内の別のテーブルにいる「生徒」が周波数を合わせてイヤフォンでそれを聞くという方法が生まれた。

なぜマクドナルドをプロジェクトの会場に選んだのか？現代の劇場は舞台上では多文化共生・多様性が成立しているが、客席は決して多文化共生はしていない。中流階級以上の白人で教育があって豊かである人が多い（多文化共生をしていない）客席を混在させるべきではないか？普段マクドナルドに行かない層に多文化共生・多様性が成立している現実を見るためマクドナルドに足を向けさせる意図もあったという。

第1回研修会では加藤さんは外国人支援の側から「当事者の声をきく」「実情を知る」「行動の奥にある、違う文化を理解する」をポイントとしながらアートの活用も訴えた。この違う「文化」を異なる価値観や行動・思想と幅広に解釈するなら、アートプロジェクト側の事例からもこの3つのポイントの意義深さが確認される。多文化共生においては異文化接触や異文化理解が基底にあること、それらを実現するための重要な手法にアートプロジェクトが成りうることを再認識した本年度の研修会となった。

（出典・初出 野呂田 純一、ジャーナル・ミュゼ、マルバ2021年度研修会、博物館・美術館ジャーナル MUSEEミュゼ 2022年、128号、p.28-p.30）

※報告書全体の統一をはかるため、原本記載の敬称の修正を行いました。



マクドナルドラジオ大学 撮影：蓮沼昌弘

2022年度

マルパ第1回研修会

「DEAIの概念からインクルーシブなミュージアムを考える」(2023年2月18日)

第1回では、東京文化財研究所文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー 博士(学術)の邱君妮(Jenny CHIU)さんを講師に迎え、ミュージアムを巡る国際的な動向を、台湾のミュージアムの展開に注目しつつ、デンマーク、オランダ、ノルウェーなど様々なミュージアムの具体的な活動例について知る機会となった。まず最初に、近年の博物館活動に欠かせない視点として「DEAI」の重要性について解説があった。DEAIとは、多様性(Diversity)、公平性(Equity)、アクセシビリティ(Accessibility)、包摂性(Inclusion)の頭文字を取った言葉である。これは、誰もが参加でき、共に学び合える場づくりを目指す考え方であり、世界各地の博物館で取り入れられ始めている概念でもある。博物館におけるDEAIとは、これら4つの要素を実践することで、誰もが対等な立場で参画できる環境を創出し、文化的権利を保障することを意味する。

研修会では、実際の事例がいくつか紹介された。デンマーク国立博物館では「植民地からの声」という展示を通じ、従来の支配者目線ではなく被支配者の視点から歴史を描き直していることがあげられ、オランダでは市民自身が生活の記録を残し、文化遺産を共有する活動が進められていることについての説明があった。

また、アメリカのニューヨーク市博物館では、多文化

社会を背景に、市民や先住民族と協力しながら展示をつくる試みが行われていることが紹介された。さらにノルウェーのオスロ国立美術館では音声や体験型の工夫を取り入れ、誰もが楽しめる空間を目指している様子について説明があった。国立台湾美術館では、子どもがキュレーターとして展示に関わる取り組みが行われ、「大人中心」の発想を見直すきっかけとなっている。

これらの例は、博物館が単に展示物を並べる場ではなく、人々の声を集め、社会と共に歩む存在へと変わってきていることを示している。一方で、すべての人に配慮しようとするとは別の誰かが不便を感じる可能性があることや、専門性と市民参画のバランスをどう取るかといった課題も多く残されている。最後に講師の邱君妮さんは「インクルーシブな博物館とは、多様な人々が自分の声を表し、社会の不平等に向き合う場である」、「考えるだけでなく、実際に行動を起こすことが大切だ」と呼びかけ、研修会を締めくくった。

本研修会では、博物館がこれからの社会で果たすべき役割について、多くの気づきと学びを得る機会となった。



写真：デンマーク国立博物館



写真：ニューヨーク市博物館



写真：国立台湾美術館提供

マルパ第2回研修会

「演劇を用いた多文化共生の試み」 (2023年3月18日)

第2回では、演劇ユニットSin Titulo主宰、東京芸術劇場人材育成担当係長の田室寿見子さんを講師に迎え、2008年から岐阜県可児市で開始した演劇による多文化共生の取り組みの中で、外国人と日本人が言語・非言語を駆使して表現し、創作活動の中で対話を模索してきた経緯について話を聞いた。また、“超多国籍都市”である東京で、同じ試みを展開しようとしている取り組みについて、共通言語が無い中「ドキュメンタリー演劇」という手法を用いた交流と相互理解について、その成果と課題について話を聞く機会となった。

岐阜県可児市は外国人労働者が多く暮らす町でありながら、日本人との交流の機会が限られていたことがあり、演劇を媒介として日本人と外国人が出会い、互いを理解する場を設けるプロジェクトが開始された。言葉が通じなくても楽しめるゲームやワークショップから始め、参加者の人生や思いをインタビューし、それを舞台作品に反映させた。こうした取り組みは「ドキュメンタリー演劇」と呼ばれるようになり、参加者の声を社会へ伝える手法として定着していった。

作品づくりの過程では、外国人参加者が直面する雇用や教育、家庭の問題が浮かび上がった。日本語習得の困難、非正規雇用の不安定さ、子どもの転校や学力低下、さらにはいじめや早すぎる妊娠・出産といったことも知ることができた。同時に、日本人参加者の中にも、引きこもりや精神的な悩みを抱える人々が含まれ

ており、演劇の場が誰にとっても居場所となり得ることが実感された。講師の田室さんは「多文化共生は外国人だけの課題ではなく、多様な価値観を共有する場が日本人にとっても必要」と強調した。

可見市での経験を踏まえ、東京芸術劇場でも多文化共生を意識した取組みが進められている。具体的には、外国人に向けた「やさしい日本語版」劇場ツアー、日本語教育と演劇を組み合わせたワークショップ、影絵を用いた自己表現のプログラムなどがある。さらに、海外ルーツを持つアーティストに自身の体験を作品化してもらう試みも始まっている。こうした活動はいずれも、参加者が自らの声を社会に届ける機会を広げるものである。

田室さんはまた、芸術の強みとして「対話の促進」を挙げた。音楽やダンスが言葉を超えて人をつなぐ力を持つ一方で、持続的な共生には互いの考えを言葉にし、共有するプロセスが欠かせない。その点で演劇は、表現と対話を兼ね備えた有効な手段であるとも語った。

最後に、今後はドイツなど海外の先進的な事例を参考にしつつ、日本における多文化共生型プログラムの可能性を探っていくと展望が示された。また、当事者自身がリーダーとして活動を担うことの重要性を強調し、人材育成にも力を注いでいく意向が述べられた。本研修会では、演劇という表現手段が人と人をつなぎ、社会の課題を共有する力を持つことを改めて実感させる内容であった。芸術を通じた多文化共生の可能性に、参加者は大きな示唆を得る機会となった。



2023年度

マルパワークショップ

「みんなのもので 誰のものでもない 絵を描こう」
(2023年9月2日、3日)

2023年9月、藤沢市アールスペースにて、アーティストのホセイン・ゴルバさんを講師に招き、マルパワークショップを開催した。ワークショップでは、まずゴルバさんが出題したテーマ「りんご」から浮かんだイメージを言葉にし、宙に指で描きながら、参加者みんなで言葉を紡いでストーリーを創作した。ストーリーがまとまったら大きな画用紙(90cm×7.2m)にストーリーに沿ったイメージをそのまま描いていった。そして、ゴルバさんの5, 6分毎の「チェンジ!」という掛け声で、参加者は描いていた場所から移動し、隣で描いた人の絵にイメージを追加していった。この流れを繰り返し、絵が完成するまで参加者は画用紙が置かれたテーブルの周りを移動し続け、作品を完成させた。

翌日の作品公開&トークイベントでは、参加者とそのご家族、講師のゴルバさん、水沢勉マルパ実行委員長、通訳の段田尚子さんらが会場に集まり、前日のワークショップや完成作品についての感想を述べあった。また、ゴルバさんの活動の中でも、子どもたちや地域の方々と協働して実施してきたプロジェクトを写真とともに紹介し、ゴルバさんと水沢実行委員長のお二人でそれらプロジェクトについての対話を行った。



マルパ研修会

「多文化共生と演劇

～その繋がりの可能性について～」(2024年2月18日)

昨年度の講師として研修会を担当した演劇ユニット Sin Titulo主宰、東京芸術劇場人材育成担当係長の田室寿見子さんを再び講師に迎え、岐阜県可児市で行ってきた活動として、外国人住民自身をワークショップのファシリテーターとして育成する取組みなどが紹介された。防災をテーマとした体験型ワークショップは全国で高く評価され、参加者が「社会の担い手」として役割を果たす道を開いた。また、引きこもり経験のある若者や海外ルーツの高校生との合同ワークでは、互いの経験を語り合うことで共感が生まれ、他者への関心が深まる様子が紹介された。

続いて、国際文化フォーラムと協力して実施された「パフォーマンス合宿(Pキャンプ)」の事例が紹介された。多様な背景を持つ高校生たちが3泊4日を共にし、演劇やゲームを通じて互いを理解するプログラムである。ここでは、参加者が自分の違いを肯定的にとらえ直すきっかけが得られ、翌年にサポーターとして後輩を支えるなど成長する姿も見られた。芸術活動が若者の自己肯定感や将来の選択にも大きな影響を与えることが示された。

東京芸術劇場での近年の取組みについても紹介があった。日本語教育と演劇を組み合わせたワークショップ、影絵を用いた活動、海外アーティストを招いたプログラムなど、多様な人々が参加できる仕組みを模索している。特にドイツから招いた演出家の実践

は、自身が難民の出自を持つこともあって参加者が安心して自己表現できるよう細やかな配慮がなされており、大きな学びとなったという。また、ミャンマー難民を支援する団体との協働は、当事者と共に考える新しい展開として期待が寄せられた。

最後に講師は、コロナ禍で改めて「芸術は不要不急か」という問いに直面したことを振り返った。芸術は生活を豊かにし、多様な価値観を受け入れる基盤をつくるものであり、単なる娯楽にとどまらない存在であると強調した。オンラインの限界にも触れ、人と人とが呼吸を合わせ、非言語でつながることの大切さを訴えた。

今回の研修会では、演劇が社会課題に向き合い、人々をつなぐ力を持つことを示すとともに、多文化共生の実践が抱える可能性と難しさの両面を考える機会となった。



©公益財団法人国際文化フォーラム

2024年度

マルパ第1回研修会

「日本に住んでる世界のひととの出会い

～難民・移民フェスで進む理解と共生～」

(2024年11月4日)

第1回では文筆家・イラストレーターの金井真紀さんをお迎えし、自身のフィールドワークと実践をもとに、「身近な関係から生まれる支え合い」の重要性を語ってもらった。金井さんははもとと人の話を集めて一冊にまとめるスタイルの執筆を続けており、パリでの取材の経験や、2022年刊行『日本に住んでる世界のひと』（大和書房）にまつわる取材裏話を交えつつ話を進めた。

講演の核心は、日本で出会ったコンゴ出身の友人ジャックとの関係から生まれた実践である。ジャックは政治的迫害を逃れて来日したが、難民認定や在留の不安定さに直面し、働けない身分（仮放免）で孤立しがちだった。金井さんは当初「助ける側／助けられる側」の非対称性に葛藤を覚えたが、互いに学び合う場としてリンガラ語教室を始めることで関係性の均衡を図ったことを紹介した。そこから発展したのが「難民・移民フェス」である。仮放免など就労制限のある人々が、自分の得意な料理、手仕事、音楽などを持ち寄って披露する場をつくることで、参加者が「担い手」として認知される機会を意図している。チリ出身の料理人クラウディオさんのエンパナダやクルドの家庭料理など、多彩な出し物は地域の関心を呼び、参加者から「今日は人生で一番嬉しい日だった」といった声

も上がったという。

金井さんは、制度的支援の重要性を認めつつも、自身は「支援者」にはなれないと正直に述べ、「友達」であることを強調した。友達としての関係性は、失敗やすれ違いも許容しつつ長く続けられるという実感につながっている。最後に、こうした小さな実践が人々の居場所や尊厳を守る一助になっていることを示し、参加者に日常の関わり方を問いかけて研修会を締めくくった。

本研修会は、個人的な関係性から広がる実践例として、地域レベルでの共生の可能性を分かりやすく伝える内容となるものであった。



©難民・移民フェス実行委員

マルパ第2回研修会

「あなたも私もしている!?無意識の差別を超えて

～マイクロアグレッションの視点から～」

(2024年11月23日)

第2回では一橋大学大学院・東京大学非常勤講師の

渋谷実希さんを迎え、無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）および微細な差別（マイクロアグレッション）を主題に、日常の言動に潜む思い込みやその影響について理解を深めた。

冒頭では、性別や職業に関する先入観を問う例題が提示された。参加者は、自身の中にある「外科医＝男性」といった無意識の連想に気づき、バイアスが誰にでも存在することを認識した。講師は、偏見を否定するのではなく、まず「気づくこと」が重要であると説明した。

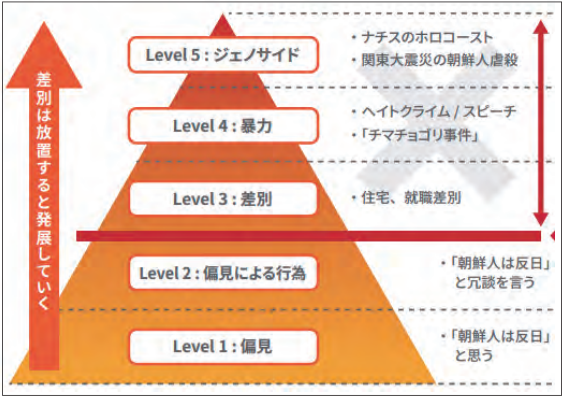
研修会では、言葉の背景にある価値観や前提についても取り上げられた。「日本人みたいですね」「女性なのに社長なんですね」といった表現が、意図せず相手に違和感や疎外感を与える可能性があることが示された。こうした言葉は、善意であっても受け手の立場によっては否定的に受け取られる場合があるとされた。

後半は、マイクロアグレッションの具体例をもとに、コミュニケーションにおける注意点を整理した。参加者はグループに分かれ、過去に経験した違和感のある言動や、自身が発した言葉が相手にどう受け取られたかを共有した。これにより、他者の視点を取り入れた言葉選びの重要性が再確認された。

マイクロアグレッションは、主に社会の主流な集団が相手をステレオタイプに当てはめたり、自分（たち）と異なるもの、外れているものとして違和感などを持つことにより引き起こされる。マジョリティは、自分たちが様々な特権を持っていること、だからこそ意識や社会を変えられる立場にいることに気づくべきであると指摘した。講師の渋谷さんは、意識の広がりを促す手法として「じわじわ作戦」を紹介した。これは、関心のあ

る層だけでなく、関心の薄い層にも少しずつ理解を広げていくアプローチであり、組織や社会全体の意識変容につながるとされた。

本研修会を通じて、アンコンシャス・バイアスやマイクロアグレッションが職場や日常生活に与える影響を具体的に把握し、より配慮ある言動を心がける必要性を確認した。しかし、傷つけることを恐れるあまり、接触を避けることは一種の排除や差別につながる。様々な背景を持つ人と関わり合う中で想像力や受容力を養っていくことを意識していきたいと結んだ。今後の対人関係などにおいて、相手の立場を尊重したコミュニケーションを実践するための基礎的な知識と視点を得る機会となった。



参考：「レイシズムのピラミッド」
『ARIC（レイシズム情報センター）ガイドブック』より

MULPA事業報告書(2021～2024年度分)

文責・編集	公益財団法人かながわ国際交流財団
装丁	スタジオニフェ<studio nifee>
協力	ミュゼ編集部
発行	公益財団法人かながわ国際交流財団(2026年2月)

Copyright © 公益財団法人かながわ国際交流財団 All Rights Reserved.

※無断転載・複製・複写・Web上への掲載を禁止します。